

「  
こ  
こ  
ろ  
メ  
ガ  
ネ  
」

○ 登場人物

谷崎涼子（12）：公立の小学校に通う  
平凡な女子

宮田カスミ（12）：涼子のクラスメイ  
ト。美人で性格も良いが陰がある。

商人の男（60）：古道具屋の主人

谷崎さとし（10）：涼子の弟

安住ちほ（10）：さとしのクラスメイ  
ト。さとしをいじめる首謀者

谷崎幸子（42）：涼子の母・パート

谷崎吾郎（45）：涼子の父・サラリー  
マン。真面目で仕事人間

松永（36）：涼子のクラスの担任  
いじめっ子A・B（10）

ちほの母（36）

カスミの母（40）

カスミの妹（3）

吾郎の上司（55）

吾郎の取引先の社長（65）

○青空小学校・外観

校門に『青空小学校』の校名板。

○同・六年三組の教室

算数の授業中、窓際、一番後ろの席に座る谷崎涼子（12）。ぼんやりと窓の外を眺めている。遠くに一台のワゴン車が走っているのが見える。それを目で追う涼子。

○路地

小学校のすぐ横の路地を走る白い大きなワゴン車。

○青空小学校・六年三組の教室

机に肘をつき、顎を載せて窓の外を眺める涼子。

涼子M「私はなぜ、私に産まれてきたんだろう」

担任の松永（36）、算数の問題が書かれた黒板を指さす。

松永「この問題、そうだなあ、谷崎、やってみろ」

涼子、窓の外を眺めたまま。

松永「おい、谷崎」

隣の席の女子が涼子の肩をつつく。

女子「涼子ちゃん」

涼子、はっとして、黒板を見る。

涼子M「特別美人でもなければ、人に自慢できる特技があるわけでもない。学校の成績もオール3だし、将来の夢もない。私はいつたい、なんのために産まれてきたんだろう」

涼子、前に出てチョークを持つが、答えが書けないでいる。

松永「もういいぞ、戻れ。宮田、解いてみろ」  
カスミ「はい」

宮田カスミ（12）、前に出て問題をすらすら解いて、席に戻る。カスミを

目で追う涼子。黒板に大きく赤丸を書く松永。笑顔のカスミ。

涼子M「私はカスミちゃんになりたかった」

タイトル『こころメガネ』

#### ○歩道（夕）

下校中の児童の中、一人、とぼとぼと歩く涼子。その横を友人に囲まれて楽しそうに話しているカスミが追い越していく。それを目で追う涼子。少し歩いたところで空地の横を通り過ぎようとして、ふと足を止める涼子。空地に停まったワゴン車を見ている。（教室から見えたワゴン車と同じ）ふらふらと空地に入る涼子。

#### ○空地（夕）

中央に白いワゴン車がハッチバックを開けて停まっている。荷台には長い白

髪で髭を蓄え白い作務衣を着た巨漢の商人の男（60）が座っている。その前にテーブルがあり、テーブルの上には様々なガラクタに見えるランプやコップなどの古びた小物が置かれている。ワゴン車の横には『大安売り』と書かれたのぼりが立っている。涼子、テーブルに近づく。

商人の男「いらっしやい」

外見に似合わず、甲高い声で喋る商人の男。立ち上がると、車体が大きく揺れる。テーブルの上を見渡す涼子。

涼子「これって、全部売り物なんですか？」

商人の男「そうだよ、お嬢ちゃんにはガラクタに見えるかもしれないけれど、ここにある物は皆、とても不思議な力を持っているんだよ」

涼子「不思議な力？」

古ぼけたランプを手に取る商人の男。

商人の男「たとえば、このランプ」

興味津々でランプを見る涼子。

商人の男「このランプに火を点けると、なんでも一つだけ願いを叶えてくれるんだ。

名付けて『願いを叶えるランプ』」

涼子「願いを叶えてくれるの？ この汚いランプが？」

怪訝な顔をする商人の男。ランプを置いて、細い縁の古びたメガネを指差す。

商人の男「お次は、このメガネ。このメガネをかけるとメガネを通して見た相手の心の中を覗くことができるんだ。名付けて『こころメガネ』さ」

涼子、メガネを手に取り、かけようとする。

商人の男「ちよつと待った。ここでかけてもらつては困るね。おじさんの心を覗かれては大変だ」

商人の男、苦笑いしながら、涼子の手首を掴む。

涼子M「えっ？ 何？ こわっ」

涼子、慌ててメガネを元の場所に戻す。

涼子「じゃ、じゃあ」

慌てた様子でその場を離れる涼子。

○涼子の家・ダイニング（夜）

ごく普通の二階建ての一軒家。ダイニングテーブルで弟のさとし（10）とコンビニ弁当を食べる涼子。ふと手を止めて考え事をしている。

×××

回想

涼子の手首を掴む商人の男。

×××

涼子M「あのおじさんは、本当に心を覗かれ  
たなくて、あんなことを言ったのかな、  
それともインチキを本物に見せようとし  
た演技だったのかな。もし、明日もあの  
ワゴン車があったら、試しにあのメガネ  
買ってみよう」

さとし「姉ちゃん、手、止まってるよ」

我に返ってさとしを見る涼子。

涼子「お母さん、今日も遅いのかなと思って」  
さとし「レジの仕事、人手が足りないんだつて。こないだぼやいてたよ」

黙々と食べる二人。

#### ○青空小学校・体育館

体育の授業。二列に並んで順番に跳び箱を飛ぶ児童たち。涼子とカスミの番。  
涼子は跳び箱の上でしりもちをつくが、カスミは飛び越える。

#### ○同・六年三組の教室

給食を食べ終わって片づける児童たち。  
カスミが教室を出ていくのに気づく涼子。

#### ○同・廊下

廊下に出てかすみを目で追う涼子。カスミは階段を昇っていく。

○空地（日替わり・夕）

前日と同じ場所にワゴン車、荷台に商人の男。その前には前日と同じガラクタの置かれたテーブル。ワゴン車の横には『大安売り』ののぼり。

涼子が空地の入り口からワゴン車に向かって走り、テーブルの手前に来る。

涼子「こんにちは。おじさん、『こころメガネ』、いくらですか？」

商人の男に向かって叫ぶ涼子。立ち上がる男。揺れる車体。

商人の男「ああ、昨日来たお嬢ちゃんだね。

お嬢ちゃん、今いくら持ってるの？」

財布を覗く涼子。財布には二千円。

涼子「えっと、千五百円です」

商人の男「じゃあ、千円でどうだい？ 格安

でお嬢ちゃんに譲ってあげよう」

財布から千円を取り出す涼子。

涼子「ください」

涼子、千円を差し出す。商人の男はメガネを白いプラスチックのケースに入れる。そして、小さく折り畳まれた紙きれを見せる。

商人の男「いいかい、ここに注意書きがあるからよく読んで、本当に必要なときだけ使うんだよ。あんまりやたらめったらこのメガネを使ってしまうと、お嬢ちゃんのためにならないからね」

商人の男、メガネの入ったケースに紙切れをしまい、手提げ袋に入れて、涼子に渡す。

涼子「わかりました。ありがとう」

商人の男「毎度ありがとうございます」

丁寧におじぎをする商人の男。

涼子「おじさん、さよなら」

手を振ってその場を去る涼子。

○涼子の部屋（夕）

涼子、部屋に入るとドアのカギをかける。ベッドの上に座ると、手提げ袋からケースを取り出し、ゆつくりと開く。メガネの上に置かれた紙切れを取ると、開いて読む。

涼子「『ころメガネ』注意事項、一、このメガネの力を決して人に話してはならない。一、このメガネの使用は一日一回までとする。一、このメガネで見た本当の心を決してその相手や他人に話してはならない。一、このメガネを他人に貸してはならない。一、このメガネが不要になったときは、二度と使えないようレンズを粉々に割り、人目のつかない場所の土に埋めること。右の注意事項のうち、一つでも破ることがあれば、いかなる災難が持ち主にふりかかったとしても、売主にその責任を追及することはできない」

涼子、ベッドに寝っ転がると、メガネを両手で持って、顔に近づけたり遠ざけたりしてメガネを眺める。

涼子「インチキだったらすぐ返さなきゃ。早速、試してみるか」

涼子、立ち上がって部屋を出る。

○さとしの部屋・ドアの前（タ）

涼子、メガネをかけて、ドアをノックする。

さとし「何？」

部屋の中からさとしの不機嫌そうな声。

涼子「ちよっと話があるんだけど、入っている？」

さとし「えー、今ゲーム良いとこなのに、なんの用？」

涼子「ここじゃ話せないから中に入れてよ」

さとし「ちよっと待って」

×××

さとし、ゲーム機の一時停止ボタンを

押す。

×××

さとし「いいよ」

涼子、ドアを開けて中に入る。

○さとしの部屋（夕）

ベッドを背に、床に座って携帯ゲーム  
を持ったまま、涼子を見上げるさとし。

さとし「何姉ちゃん、なんでそんなぼろっ  
ちいメガネかけてんの？」

涼子「ぼろっちいって失礼な。アンテイク  
よ。だてメガネ。ちよつとイメチェンよ」

涼子、メガネの弦をつまんで上げ下げ  
する。

さとし「話ってなんだよ」

涼子「あんたさあ、いつも部屋でゲームばっ  
かしてるけど、友達いないの？」

さとし「余計なお世話だよ。姉ちゃんには関  
係ないだろう」

ゲームを再開しようとするさとし。涼子の目の前に一瞬真っ白な靄がかかる。

×××

○青空小学校・四年二組の教室（回想）

靄が晴れて、四年二組の教室が見える。教室の真ん中で、安住ちほ（10）に突き飛ばされて倒れて泣いているさとし。さとしの周りには、馬鹿にするように笑ったり、見てみないふりをするクラスメイト達。

○同・廊下

ポツンと置かれた机といす。机にはマジックで書かれた『死ね』の落書き。

○同・トイレ（個室）

泣きじゃくるさとし。

靄がかかる。

×××

○さとしの部屋（夕）

涼子を訝しげに見るさとし。

さとし「姉ちゃん、話ってそれだけなら出て  
つてよ」

さとしの言葉にはっと我にかえる涼子。

涼子「あんた、いじめ……」

×××

回想。注意書きの紙。

涼子M「一、このメガネで見た本当の心を  
決してその相手や他人に話してはならな

い。」

×××

頭を横にふる涼子。

涼子「さとし、もし、悩んでいることがある  
なら姉ちゃんに言いなよ。相談にのるか  
らさ」

さとし「なんだよ。気持ち悪いなあ。急に優  
しくするふりして、おこづかい貸せとか  
言うんじゃないだらなあ」

涼子「なによ、人が親切にしてやってんのに、  
その言い草はないんじゃない？」

涼子、さとしのことを気にしつつ部屋  
を出る。

○涼子の部屋（夕）

ベッドに座り、メガネをはずす涼子。

涼子「このメガネ、本物だったんだ。さとし  
がいじめられてるなんて、ちっとも知ら  
なかった。どうすればいいんだろう。ど  
うすればいじめをやめさせられるんだろ  
う」

パタンと横になり、考える涼子。

○青空小学校・四年二組の教室・廊下（日替  
わり）

教室の入り口から中を覗く涼子。さと  
しはいない。廊下に一つだけ机が置か  
れている。その机には『死ね』の落書  
き。机の中の道具箱に『谷崎さとし』  
の名前。

涼子 M 「一体誰がこんなことを。こんなあからさまないじめをしてるのに、このクラスの仕事は何してるの？」

メガネをかけて教室に入る涼子。

○同・内

涼子、窓際で話している3人の女子のところへ行き、真ん中のちほに話しかける。

涼子 「ねえ、ちょっといい？ 今六年の道德の授業で下級生にアンケート取ってるんだけど、このクラスでいじめはない？」

ちほ 「えー？ いじめ？ そんなのないよ」

他の二人と含み笑いをするちほ。

涼子 「ちょっと来て」

廊下に出る涼子とちほ。

○同・廊下

ちほの腕を掴んで机をちほに見せる。

涼子「さつき、いじめはないって言ったよね。

じゃあ、この机は何？」

ちほ「これはただのいたずら書きよ。自分で書いたのかも」

涼子「『死ね』なんて自分で書くわけないでしょ！ いい加減なこと言わないで！」

ちほ「この落書きがなんだっていうの？ さ  
としのやつ、いつも下向いて、暗くて、  
弱っちくてさー、さとしなんていじめら  
れたって仕方ないよ。悪いのはさとしだ  
よ」

涼子の目の前に靄がかかる。

×××

○ちほの家・リビング（回想）

豪華な一軒家。靄が晴れるとちほが母  
親から叱られている。

ちほの母「あなたもお父さんみたいな立派な  
お医者様になりたいでしょう。お受験、  
失敗したんだからもっと頑張らないと。  
今のままじゃだめよ」

うなだれるちほ。

ちほ M 「私は医者になんかなりたくない。お母さんは私のこと何も分かってない。お母さんは私のことが嫌いなんだ」

靄がかかる。

×××

○市立青空小学校・四年二組の教室・廊下

はっと我に返る涼子。知らん顔して教室に戻っていくちほを見つめる涼子。

涼子 M 「お母さんに叱られる腹いせにさとしをいじめてたのかな。どうすればいいんだろう」

○涼子の家・ダイニング（夜）

コンビニ弁当を食べる涼子とさとし。

さとしを見つめる涼子。

さとし 「なんだよ、さつきから、気持ち悪い」

涼子 「お姉ちゃんがなんとかするから」

さとし 「なんのこと？」

涼子「なんでもない。早く食べな」

さとし「なんだよ」

無心に弁当を食べる二人。

○青空小学校・靴箱の前（日替わり・早朝）

人気のない靴箱であたりをみまわす涼子。そっと靴箱のひとつに手紙を入れる。ネームプレートに安住ちほの名前。

○同・靴箱（朝）

靴を脱ぎ、靴箱の扉を開けるちほ。上履きの上に手紙があるのに気づき、取り出す。差出人を確かめるけれど何も書かれていない。

○同・女子トイレ（個室）

手紙を開けるちほ。汚い字で書かれた手紙の文面。

謎の男子（声）「ちほさんへ　ぼくはずっと、ちほさんのことが気になっています。ぼ

くはちほさんが心のやさしい人だと知っています。本当は堂々と会って告白したいのだけど、まだ勇気がないので手紙を書きました。いつか僕に勇気が出たらちやんと会って告白します。そのときまで僕のことは秘密にしておきます。これからも、心のやさしいちほさんでいてください。さようなら」

手紙を抱きしめ笑顔になるちほ。

○同・靴箱（日替わり・朝）

靴箱の周りをそわそわしながら歩いているちほ。手紙を抱きしめている。靴を履き替えている男子の顔を見ている。知らん顔の男子児童。首をひねるちほ。次に来た男子の顔を見ている。変な顔をしてちほを見る男子児童。靴を履き替えると行ってしまう。首をひねりながら後ろ姿を見ているちほ。

○同・四年二組の教室

落書きが消されたさとの机が元の場所に戻されている。授業の準備をするさとしや児童たち。

○涼子の家・ダイニング（日替わり・夜）

コンビニ弁当を食べる涼子とさとし。  
さとし「姉ちゃん、たまには一緒にゲームしようよ。いつもコンピュータ相手ではないからさあ」

笑顔で涼子に話しかけるさとし。その笑顔に何かを察したように笑顔で答える涼子。

涼子「うん、わかった。じゃあご飯食べたらゲームしよう。後片付け手伝ってよね」  
急いで弁当をかきこむ二人。

○青空小学校・六年三組の教室（日替わり）

授業が終わり、教科書やノートを片づける涼子。カスミが教室を出ていくのに気づく。

涼子M「カスミちゃん、時々一人でどこかに行くんだよね。何か悩みがあるのかな」

涼子、ランドセルから『こころメガネ』を取り出すと、カスミの後を追う。

#### ○同・廊下・階段

階段を昇っていくカスミを見つけて、後を追う涼子。屋上の手前の踊り場で座り込むカスミ。メガネをかけて、カスミに話しかける涼子。

涼子「カスミちゃん」

驚いて顔を上げるカスミ。カスミの隣に腰掛ける涼子。

カスミ「涼子ちゃん、どうしたの？ あれ？  
メガネかけてたっけ」

涼子「ああ、これ、だてメガネなの。たまにはインテリっぽく見られたいじゃん？」

弦を上げ下げする涼子。

カスミ「よく似合ってるよ。で、私に何か用？」

涼子「あ、あのさ、私いつも不思議に思ってた。時々どこかに消えちゃうでしょ、カスミちゃん。今日たまたま階段昇ってくの見かけてさ、つい追いかけてきちゃった」

カスミ「あはは、そうなんだ。うーん、別にね、深い意味はないんだけど、たまにここで一人でぼーつとしてるとすごく落ち着くの。時々寝ちゃって授業に遅れそうになったりするんだ。はは、ドジだよね」

涼子の目の前に靄がかかる。

×××

# ○カスミの家（回想・夜）

靄が晴れるとカスミの家。普通の一軒家。リビングの棚に外国にいるカスミの父親の写真。ダイニングテーブルで

妹（3）がご飯を食べている。その世話をするかたわら、リビング横の和室で寝ている母親に薬を運ぶカスミ。

カスミの母「ごめんね。カスミ。お母さん、こんなで」

カスミ「私は大丈夫よ。だから心配しないで  
ゆつくり休んで」

#### ○歩道（回想）

両手に買い物袋、トイレットペーパー  
を持って、苦しそうな表情で歩くカスミ。

#### ○公園（回想）

妹と砂場で遊ぶカスミ。妹がわがままを言っ  
て泣いている。困った顔で妹をなだめるカスミ。

靄がかかる。

×××

カスミ「涼子ちゃん、どうしたの？ さつき  
からぼーっとしちやって」

我に返る涼子。

涼子「カスミちゃん、明日の休み時間、私も  
ここに来ていい？ カスミちゃんと話し  
たいこと色々あるんだ」

きよとんとするカスミ。

カスミ「いいよ。私も涼子ちゃんとおしゃべ  
りしてみたかったんだ」

### ○涼子の部屋（夜）

机の引き出しにメガネのケースをしま  
う涼子。

### ○青空小学校・屋上前の踊り場（日替わり）

踊り場に座ってとりとめない話をする

カスミとメガネをかけていない涼子。

涼子「：前からずっと不思議に思ってたんだ  
けど、カスミちゃんは美人でなんでもで

きて、性格もいいのに、時々すごく寂し  
そうな顔をするのはどうして？」

カスミ「涼子ちゃん……。そんな風に言われた  
の初めて。いつも皆にカスミちゃんは悩  
みなんてないんだろうって言われてるか  
ら。涼子ちゃんには隠し事なんてできな  
いね。……私ね、本当はいつも泣きたくて  
たまらないの」

カスミからいつもの笑顔が消えた。

カスミ「うち、お父さんが単身赴任で時々し  
か帰って来なくて、お母さんは妹産んで  
から体が弱くて、妹はまだ3歳だし、い  
つも私がしつかりしなくちゃって頑張る  
んだけど、時々すごく疲れちゃうの」

肩を震わせ涙声になるカスミ。

カスミ「でも、誰にも迷惑かけたくないから  
何でもないふりしてた。だけど今は涼子  
ちゃんがそばにいてくれるから、私、私  
……」

激しく肩を震わせ、両方の目から大粒の涙を流すカスミ。そつとカスミの肩を抱く涼子。

涼子「カスミちゃん、泣きたいときは泣いていいんだよ。私はカスミちゃんが怒ったり、すねたり、わがまま言ったりしても絶対嫌いになったりしないから。だから、私の前では何にも我慢しないで、ありのままのカスミちゃんでいて。私はずっと、カスミちゃんの味方だよ」

カスミ「涼子ちゃゝ、ありがとうゝありがとうゝうゝ」

### ○街灯（夜）

点滅する街灯。

### ○カスミの家・キッチン（日替わり・夜）

晩御飯の支度をするカスミと涼子。ダイニングテーブルにお皿を運ぶさとしとカスミの妹。

涼子M「あれからカスミちゃんの家で晩御飯を一緒に作って食べるようになった」

パジャマ姿で肩にカーディガンをかけてたカスミの母もテーブルに着いている。カスミが母の肩に手をかけて言う。

カスミ「お母さん、今日は少し気分がいいから一緒に食べられるんだよね」

うなづくカスミの母。

カスミ「ちよっとトイレ」

トイレに入るカスミ。

カスミの母親「涼子ちゃん、いつもありがとうね。ここ最近、かすみ元気な笑うようになったの、あなたのおかげよ。本当にありがとう」

涼子の手を両手で包むかすみの母に笑顔で首を横にふる涼子。

涼子「私こそ、カスミちゃんと仲良くなれて嬉しいんです」

×××

ご飯を食べ終わり、片づけをする面々。

8時を知らせる時計の音。ピンポーン  
とチャイムが鳴り、涼子の母幸子（4  
2）が玄関に立っている。

涼子「お母さん、迎えに来た。じゃあね。カ  
スミちゃん」

カスミ「またね」

涼子「おばちゃん、さようなら」

カスミの母と妹に手を振る涼子とさ  
し。

カスミの母「またね、涼子ちゃん、さとし君」  
カスミの妹「お姉ちゃん、お兄ちゃん、バイ  
バイ」

さとし「バイバイ」

○幸子の車・車内（夜）

黙りこくって運転する幸子。

涼子「お母さん、今日ね、カスミちゃんのお  
母さんも一緒にご飯食べたんだよ。あり  
がとうっていわれちゃった」

返事をしない幸子。

涼子「ねえ、お母さん、今日のお母さん、なんだか変だよ」

それでも返事をしないで運転を続ける  
幸子。さとしと顔を見合わせ、首をひねる涼子。

○涼子の家・ダイニング（日替わり・朝）

パジャマ姿でダイニングに現れる涼子。  
テーブルではさとしが一人でトーストを食べている。

涼子「あれ？ お父さんとお母さんは？」

さとし「お父さんは休日出勤。最近、ずっとだね。お母さんは部屋から出てこない。まだ寝てるんじゃない？」

涼子「こんな時間まで寝てるなんて、どうしたんだろう。最近、お母さん、おかしいよね」

涼子、コップに牛乳を注いで飲む。

さとし「姉ちゃん、僕のも。お母さん、お父さんが休みの日も仕事行っちゃうから、ずっと怒ってる」

涼子、コップに牛乳を注いでさとしのところに置く。

涼子「ちよっと様子見てくる」

#### ○涼子の部屋（朝）

涼子、机の引き出しからメガネのケースを取り出す。

涼子「かすみちゃんに初めて声をかけたときから、ずっと使ってなかったけど：よし」

涼子、決心したようにうなずいて部屋を出る。

#### ○寝室（朝）

メガネをかけた涼子、寝室に入り、ベッドのそばで膝をつく。母親は頭まで布団をかぶって寝ている。

涼子「お母さん、ねえ、起きて。もうすぐお

昼が来るよ」

幸子を揺さぶる涼子。

幸子「お母さん、体調が悪いの。寝かせて」

涼子の目の前に靄がかかる。

×××

靄が晴れると深夜、リビングで喧嘩をする両親の姿。

幸子「：そんな大声出さないでよ。子供達が起きるじゃない」

コップのビールを一気に飲み干す父吾郎（45）。

吾郎「お前が俺を疑うようなこと言うからだろ。さつきから何回同じこと言わせるんだ。部署が異動になってから毎日忙しいんだ。疲れて帰ってきて、お前がそんなじゃ、俺の気が休まらないよ。まったく」  
リビングを出る吾郎、ボタンとドアを閉める。

幸子 M 「絶対あの人は浮気してる。何か証  
拠を掴まないとい。このままじゃ、私気  
が狂いそう」

テーブルに突っ伏して頭を抱える幸子。  
靄がかかる。

×××

我に返る涼子。

涼子 M 「お父さんが浮気？ そんなのありえ  
ない。お父さんがそんなことするはずな  
い。何かの間違いよ」

呆然としながら寝室を出る涼子。

○涼子の家・リビング（日替わり・深夜）

ソファに座って眠いのを我慢している  
涼子。メガネをかけている。玄関のカ  
ギを開ける音。吾郎がリビングに入っ  
てくる。

吾郎 「ただいま。あれ？ 涼子か。なんだこ  
んな時間まで起きて。母さんは？」

涼子「もう寝てる。お父さん、ちょっと話があるんだけど」

吾郎「そのメガネどうしたんだ。ブスがよけいブスに見えるぞ」

ネクタイを緩めながら、冷蔵庫から缶ビールを取り出す吾郎。

涼子「ひどい。それより、お父さん、最近仕事遅いよね、休日出勤も。そんなに忙しいの？」

缶ビールのプルタブを開けて一口飲む

吾郎。

吾郎「ああ、そうだよ。部署異動があったからな。父さんはクタクタだ。お前ももう寝ろ。明日も学校だろ」

涼子の目の前に靄がかかる

×××

○会社・会議室（回想）

靄が晴れると吾郎の勤める会社。上司に怒鳴られてペコペコ謝っている吾郎の姿。

上司「お前のミスのせいで多額の損害が出たんだぞ。どうしてくれるんだ」

吾郎「申し訳ありません。本当に申し訳ありません」

○取引先の会社（回想）

取引先で何度も頭を下げる吾郎。

○オフィス街（回想）

汗を拭いながら走り回っている吾郎。

霏がかかる

×××

吾郎「おい、涼子、聞いているのか。早く寝ろ」

涼子、はっと我に返る。

涼子「おやすみなさい」

吾郎「ああ。おやすみ」

涼子、部屋に戻る。

○涼子の部屋（深夜）

メガネをはずして机に置き、ベッドに入る涼子。

涼子M「お父さん、やっぱり浮気じゃなかった。それにしても、お父さんがこんな大変な思いしてるなんて、ちっとも知らなかった。このこと、どうやってお母さんに伝えよう」

天井を見つめる涼子。

○歩道（日替わり・夕）

ひとり、とぼとぼと歩くランドセル姿の涼子。

○涼子の家・玄関外（夕）

学校から帰宅する涼子。

涼子M「あれから一週間、ずっと考えたけど、答えはみつからない。どうやって伝えたらいいんだろう」

玄関に入る涼子。

涼子「ただいま」

○涼子の家・ダイニング（タ）

ダイニングテーブルで椅子に座って、  
大量の薬を飲もうとしている幸子。そ  
こへ涼子が入ってきて幸子に駆け寄る。

涼子「お母さん！ 何やってるの？」

涼子、幸子の手首を掴む。

幸子「死なせてよ。死にたいの。お母さん、  
辛い」

泣き出す幸子。しばらく悩むが意を決  
したように話し出す涼子。

涼子「お母さん、お父さん、浮気なんかして  
ないよ。お父さんは本当に仕事が大変な  
の。大きな失敗をして信用を失ってしま  
ったの。その信用を取り戻そうとして、  
お休みの日も頑張ってるの。お父さん、  
きっと、失敗したなんて言えなかったん  
じゃないかな」

幸子「なんで、なんで涼子がそんなこと知ってるの？ お父さん、私には何も話してくれないのに」

涼子「お父さんは何も言わないよ。私、不思議な力を持つてるメガネでお父さんを見たの」

幸子「メガネ？ 何を馬鹿な事言ってるの？ そんな話、信じられるわけじゃないでしょう。いい加減にして！」

立ち上がって、去ろうとする幸子。

涼子「待ってよ、お母さん。私、お母さんが死にたいって言うから、本当のこと打ち明けたんだよ。本当はメガネの事誰にも話しちゃいけないけど、お母さんに死んでほしくないから話したんだよ。ねえ、信じて。信じられないなら、私と一緒にメガネを買ったところに行こう。お店のおじさんにルール破ったこと謝らないといけないし、ねえ、一緒に行こう」

信じられないという風に涼子を睨みつけていたが、仕方なくうなづく幸子。

幸子「わかった。着替えてくるから」

#### ○空地（夕）

中央に例のワゴン車。ハッチバックの前に立って伸びをしている商人の男。そこへ、涼子が幸子を連れて走ってくる。

涼子「おじさん、大切な話があるの」

息を切らしながら男の前に来る涼子。

その隣に幸子。

涼子「おじさん、ごめんなさい。私、このメ

ガネのルール、破っちゃったの」

男にメガネを差し出す涼子。

商人の男「ルールを破ったって、どういうことだい？」

ワゴン車の荷台に腰掛ける男。車体が揺れる。

涼子「このメガネの秘密をお母さんにしやべ

っちゃったの：」

ルールを破ることになったいきさつを男に話す涼子。涼子の目から涙がぽろぽろと零れ落ちる。泣きじゃくる涼子を幸子が支える。

幸子「本当にこのメガネで人の心を知ることができるとしてしまっただけですか？　何か大きな罰を与えられるというなら、どうか、この子の代わりに私に罰を与えてください。この子は私のためにルールを破ってしまったのだから」

幸子に向かってほほ笑む男。

商人の男「お母さん、このメガネの力は本物です。そして、このメガネに課せられたルールは、メガネを悪用されないためにあるんです。今までこのメガネで金儲けを企んだり、人を欺いたりして、身を滅

ぼしてしまった人達を何人も見てきました」

商人の男、涼子の方を見る。

商人の男「このメガネのルールを破って悪用した人達は結局、自ら罰を受けることになっていった。でも、お嬢ちゃんは違う」

涼子に優しく微笑みかける男。

商人の男「お嬢ちゃんはお母さんを助けるためにこのメガネを使い、お母さんに真実を打ち明けた。ルールを守るとは大切なことだけれど、時にはルールを破ってでも大切な物を守らなければならないこともある。それに、このメガネを持ったことで、お嬢ちゃんはじゅうぶん、苦しんできたはずだよ」

涼子、涙をぬぐって男を見る。

涼子「おじさん、そうなの。私、このメガネを手に入れてから、ずっと苦しかった。一人で秘密を抱えていることがこんなに苦しいなんて知らなかった。だから、お

母さんに打ち明けたときは正直、心がスツと軽くなった気がした。ルールを破ってしまったけれど、これでもう、一人で秘密を抱え込まなくていいんだって思った」

商人の男、真剣な表情になる

商人の男「お嬢ちゃん、お嬢ちゃんがルールを破ったのは確かにお母さんを救うためだった。でも、ルールを破ったってことはもうこの『ころメガネ』を使うことはできない。わかるね」

涼子「はい、おじさん。私にはもうこのメガネは必要じゃない。大切なのは人の心を知ることじゃなくて、理解しようと努めることなんだよね。私、この『ころメガネ』に大切なこと沢山教わった」

商人の男「それでは、注意事項の最後にあるように、このメガネを自分で処分できるね」

涼子「はい、必ず処分します。おじさん、

色々ありがとうございました」

涼子、幸子と一緒に丁寧にお辞儀する。

商人の男、にっこり笑ってうなづく。

#### ○涼子の家・裏庭（夕）

メガネを金槌で粉々に砕き、土に埋める涼子。晴れ晴れとした顔で手の泥をはたきながら立ち上がる。

#### ○青空小学校・階段の踊り場（日替わり）

カスミと並んで踊り場に座っている涼子。

涼子M「私は、カスミちゃんに『こころメガネ』のことを全て打ち明けた」

涼子「…でもね、これだけは信じてほしいの。私、カスミちゃんにメガネを使ったのは、最初に話しかけたあの時だけだから。あの一度きりでカスミちゃんにメガネを使

うのはやめようってかたく心に誓ったんだから」

カスミ「涼子ちゃん、わかってるよ。だって、涼子ちゃんがメガネかけてたの、あの時だけだったもの。私はちゃんとわかってる。それにね、前に涼子ちゃん、自分には取り柄がないって言ってたけど、そんなことない。涼子ちゃんは私の本当の心に気付いてたもの」

涼子「でも、それは『こころメガネ』で……」

カスミ「ううん。涼子ちゃんは私が寂しそうな顔をしてたから『こころメガネ』を使ったんでしょ。涼子ちゃんは『こころメガネ』がなくても、誰も気づかなかった私の心に気付いてくれた。それって、すごく大事なことだと思うの」

涼子「でも私、メガネがなかったら、さとしがいじめられてたことも、お父さんの仕事がどんなに大変かってことも気づかなかった。同じ屋根に住んでも、血の繋

がった家族でも、相手の事、知ろうとしなければ知らないままなんだよね。私がカスミちゃんのこと、気付けたのはカスミちゃんのこと、もっと知りたいって思ってたからだよ、きつと」

涼子に笑いかけるカスミ。それにこたえるように微笑む涼子。

#### ○空地（夕）

空地の前を通りかかる涼子。空地にはワゴン車も商人の男の姿もない。

涼子M「あのおじさん、何者だったんだろう。あのメガネに出会うまで、私は私のことしか考えてなかった。私はもう、カスミちゃんを羨ましいと思ったらしい。私は私に産まれて来て良かったと思う」

笑顔になって、元気に走り出す涼子。

#### ○涼子の家・玄関・外（夕）

玄関でドアに手をかける涼子。メガネが埋まってる場所を見る。何かキラツと光る。笑顔でドアを開ける涼子。

涼子「ただいまー！」

終